

阪東本教行信證略解題

本書は夙に宗祖聖人の御草本として名高く、或は稱して阪東御真本ともいふ。今現に東京淺草別院寶庫に保管せらる。予、舊臘十八日同別院に於て、親しく是れを手にし拜見することを得たり。本書が果して著者自筆の原本なりや否やに就て、曾ては門外史學者の中に此を疑議する者ありしと雖、今や佛教史學の進運に伴ひ、幾多の書史學的根據を以て、それが眞本なること一點の疑ふべき餘地なきを立證し得べきのみならず、又以て、本書が宗祖聖人の眞蹟如何を決定すべき唯一標準たること、内外史學者の等しく相許すに至れり。其體裁は方冊本六冊より成り、表紙は當時の錦織地を以て飾らる。原寸豎九寸五分、横七寸五分あり。用紙の種類は凡三種にして、美濃紙最も多く、所謂寫經紙（鳥の子様のもの）繪旨紙（薄藍色紙）これに次ぐ。第一冊教行二卷には五葉の寫經紙を交へ、第二冊信卷には四十六葉の繪旨紙を挿入し、第三冊已下は全部美濃紙を以つて成せり。各頁の行數は八行を普通とし、まゝ六、七、若しくは九行の所もありて一定せず。報恩寺所傳によれば、貞永年間宗祖聖人御歸洛の途上、箱根に於て直弟性信房に附屬せしめ給ふ所なりといふ。（二十四輩次第記）。思ふに、首卷と末卷との奥に記されたる識語『弘安陸癸未二月二日釋明性讓預之』の文より推すれば、本書が一時、下總の住人、聖人直弟善性の門人明性なるもの、手に渡りしを知るを得べく、たゞひ、末卷奥に記されたる識語『沙門性信花押』の文字ありたればとて、これが果して性信房の所藏なりしや否やは、尙ししばらく疑問として存すべきも、後世、性信房の子孫によりて傳襲する所となり、遂に今日に立ち至りたるやは頗る明らか也。

本書にはまゝ、缺割の文字を使用せるを見、また使用したる送假名、左訓、並に返點の古風なるを見る。その他所々に塗抹改竄の跡を存せるなどは、本書の御草本たる所以にして、これ實にその特色也。詳しくは無盡燈所載山田文昭師の論文『教行信燈の御草本に就て』を参照すべし。掲出の寫眞は信卷別序の全文にして當日の撮影にかゝりしものなり。（日下無倫識す）

図版Web非公開